国立国語研究所学術情報リポジトリ

パネル・ディスカッション

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2017-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 狩俣, 繁久, 菊, 秀史, ペラール, トマ, 呉人, 惠, 木部, 暢子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000895

国立国語研究所　第３回国際学術フォーラム

「日本の方言の多様性を守るために」

パネル・ディスカッション

パネリスト：狩俣　繁久／菊　秀史／トマ・ペラール／呉人　恵

司会：木部　暢子



学校での方言教育

木部　それではディスカッションをしたいと思います。

最初に、たくさんの方からご質問をいただきました。すべてにお答えすることは難しいかもしれませんが、まず狩俣さんから順番にご質問に対するお答えというかたちでお話しください。

狩俣　「琉球列島と近い台湾、国交流のあった中国との関係はどうなっていますか」という質問があります。

琉球方言への中国語の影響は非常に表面的で、数が限られています。中国語の影響は主に文化的な単語に多くて、たとえば料理の名前とか、「ニッケル」のことを「洋銀」と書いて「ヤンジン」というのですが、そういう文化的な単語が多くて、琉球方言にある漢語の多くも本土から入ってきた漢語のほうが圧倒的に多いので、中国語の直接の影響はほとんどありません。

しかも琉球方言に入っている中国語の影響も首里方言、那覇方言に入っていて、宮古、八重山などの地方の方言には直接は影響はありません。

それからもう一つ。これはたぶん後



で議論になるかもしれません。「学校教育の中で方言を教えることができないか」というのがあります。実は私もそういうことは考えていまして、私は方言教育は可能だと思います。ただしそれは研究者や菊秀史さんたちのような地元の人たちだけではなくて、行政も関わる問題です。行政の役割は非常に大きいと思いますが、可能だと思います。

それから、それをどの程度教えるかという問題があると思うのです。たとえば今、小学校2年生用に「私たちの宜野湾市」とか「私たちのなになに村」とかという副読本があって、それをもって地域の自然とか地理について勉強します。それと同じ、たとえば私が住んでいるのは普天間飛行場のある沖縄県の宜野湾市ですが、「宜野湾市の文化とことば」といったような副読本を作って、地域の文化とはどういうものなのか、地域のことばとはどういうものなのかという、基本的なことを教える教科書から英語の教科書のような方言そのものを教えるものまで、いろいろなレベルのものがあるので、どこまで、どの程度、どのように教えるかということに関しては様々な議論があると思います。そういう議論は必要かと思います。

もう一人の方が「本土方言の場合の共通語に近いような方言では、方言教育は難しいのではないか」という質問があるのです。私はそういう方言でも作るべきだと思います。たとえば京都の文化とことばとか、ことばとはどういうものなのかといったことについて、京都は京都で、等し並みの方言ではなくて、京都の中でもいろいろに個性のある、少しずつ変わった方言があるでしょうから、そういった身近なところから言語教育を始める。それが大きく違う言語に対するバイリンガル教育の基礎的なものだと思います。それは当然どこでもやるべきだと私は個人的には考えています。以上です。

方言はなぜ大切か

木部　では、菊さん。

菊　たくさん質問が来ています。まず一つ。「方言が大切という意味がわからないという子どもたちに対して、具体的にはどのようにお話ししていらっしゃいますか」という質問が来ております。

たとえば小学生の低学年などの場合には、私もなぜ大切なのかということを具体的によく言えませんし、感覚に訴えるようにしています。

与論島は先ほどご覧いただいたような白いきれいな砂浜と、珊瑚礁に囲まれている島です。与論の子どもたちは東京に行きますと、ディズニーランドがあったり、高いビルが並んでいたり、おしゃれな洋服が買えたりする。そうすると東京に憧れるわけです。地元にいると「与論島って何もないよね」という感じで言っているわけです。

「では与論島の海をすべて埋め立てて、ここにディズニーランドを作ってしまうか。いっぱいホテルを建てて、観光客をいっぱい呼び込んで、ビル街にするか。大型ジェット空港を作るか」

という話をするわけです。「そのためには与論島のきれいな海を全部埋め立てないといけないけどね」という話をすると、「いや、海は埋め立ててほしくない。あの白い砂を残してほしい」と子どもたちは言うわけです。そういうレジャー施設はほしいけれども、島の海は汚してほしくないというわけです。

どうしてそう思うのかと聞くと、その子どもは答え切れないわけです。うまく説明できないけど、あのきれいな浜は残してほしい、というわけです。私は「皆さんもよくわからないけれども、そう思うでしょう」と。「よくわからないけれども、あのきれいな海は、きれいな砂浜は大事だな」と。

「だからみんな、そういうものがあるんだ。ことばだって一緒なんだよ。皆さんも大きくなったらそう思うだろうけれども、ことばというのは、与論島の歴史が数千年あるとして、島に人が住み始めて社会生活が始まって、その先祖の歴史の中で現在のユンヌフトゥバが成り立っているわけです。その数千年かかってできあがった島のことばを、共通語が話せるからいらないということで、失ってはいけないのではないか。目に見える宝物だったら残さないといけないと思うだろう。しかしことばというのは目に見えないものですから、その大切さに気付かないと思うのです。でも残すべき大切な宝物です」と。このように海の埋め立てのことで話をしたりします。

もう一つは、沖縄本島が隣ですが、アメリカの兵隊さんが大勢いらっしゃいますが、そのご家族が隣島の与論にちょいちょい遊びに見えるのです。そうしますと、ご主人はアメリカの人だけど、奥さんが日本の人だったりするケースもあって、家族連れで見えますと、小さなお子さんがいわゆるバイリンガルなのです。幼稚園か1年生くらいの子どもたちがみんなバイリンガルで話しているわけです。それを私がそばで見ると、この子どもたちはすごいなと思うのです。

それで私も、子どもたちに「私たちが使っているのは、方言とは言うけれども、外国語と共通語みたいに差があるわけだから、2つの言葉を使える君たちの父ちゃん、母ちゃん、じいちゃん、ばあちゃんはすごい能力を持っているんだ。残さないのはもったいないよね。だから君たちもぜひ覚えてほしい。先祖から伝わってきたことばだから覚えてほしいし、君たちのお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんにも、「おじちゃんがそう言っていた」とお家に帰ったら伝えなさいと言っているのです。

地元におりますと、共通語と方言をしゃべるというのは、なんの価値があるのと思うわけです。そこのどこが素晴らしいのかと思うだろうけれども、客観的に見れば2言語しゃべっているようなものですから、これは素晴らしいことだと思うのです。これを普通にできることを、大人が自分のわが子に、あるいは地域の子どもに伝えていないというのは本当は怠慢だと思うのです。子どもには責任はありませんから。先ほど木部先生のお話にもありましたように、大人とか親が自分の先祖から伝わってきたことばをどう認識するかということがとても大事なことかと思っています。

それから、共通語は東京方言が中心になっています。東京方言も方言の一つなので、どうしても表せないような

ものがあるわけです。たとえば「ナグリャー」という言葉があります。これは「ああ、かわいそう」という意味が一つです。もう一つは、たとえば音信不通だった人に数十年ぶりに会ったりしたときに、「アッセー、ナグリャー」と言うのです。東京語で言えば「ああ、久しぶり」になるのでしょう。でもその「ナグリャー」という言葉は「久しぶり」の意味だけではないのです。すごく愛情がこもっている「よくぞ元気だったか」とか、「ああ、愛しい」とか、「ああ、よくぞ無事で」ということがある。これはとても東京語では表現できない感情のこもった言葉です。

あとは、何か呆れ返ったりするときに、また「アッセー、ミンギヌピチュ」というものがあります。この「ミンギヌピチュ」というのは、直訳しますと「ミンギヌ」が人間です。「ピチュ」が人。「アッセ、人間、人」ということなのですが、呆れ返ってしょうがないときなどに「アッセー、ミンギヌピチュ」と言います。今はその他にちょっと思いつきませんが、こういう独特な言い回し、言葉がたくさんあるのです。そういうものも多言語の素晴らしいところではないでしょうか。そういうことも、子どもには学校で話をしたりしています。

方言は古いことばか

ペラール　いただきました質問の中からいくつか関連するものをまとめてお答えしたいと思います。まずは、なぜ大神方言のような方言がこんなに変わっているのか、方言とはいつも古いものなのかという質問です。

ことばは常に変わっていくものです。それをことばの乱れと批難する人もいますが、ことばの変化は誰も防げません。時間が経てば必ず変わっていくのです。たとえば、平安時代の『伊勢物語』に「昔、男ありけり」という表現がよく使われていますが、「ありけり」という語形は今の標準語ではなくなってしまいました。しかしそれを誰も乱れとは言っていませんが、同じことです。

大神方言の変わった特徴も時代の変化がもたらしたものです。そのことばが限られた地域で話されており、そこでしか流行らないことば、表現、発音の癖が必ず生まれてくるのです。時代が変わるとそれがだんだん重なっていって、そこにしかない特徴が多くなります。それが多くなると、隣の方言とコミュニケーションが取れなくなります。そういう時は、ただの方言ではなく、別の言語になったと言えます。

古いものが方言に残りやすいと言いましたが、「古いもの」というのは、他の方言ではもうなくなった古いもののことで、方言全体が必ずしも古いという意味ではありません。他のところでは失われた古い特徴が残る一方、新しいものもどんどん生まれていきます。

それから、方言と言語の区別について質問がありました。私から見れば、沖縄と宮古、または本土の標準語と琉球列島のことばの違いは非常に大き



く、そのくらいの違いがあれば別の言語と言ったほうがよいと思います。たとえばフランスの隣のイタリアのことばは、フランス語と非常に似ており、木部先生が指摘したような対応関係もきちんとあります。イタリア語は聞いてもなかなかわかりませんが、簡単な話だったら、少し単語を拾ってコミュニケーションが取れないこともないです。去年、パリの電車の中で「ディズニーランド行きの電車はどれですか」とイタリア語で聞かれて、フランス語で答えたのですが、通じました。（笑）そこで「フランス語がイタリア語の方言だ」と言われたら、それはおかしいと思います。自分がフランス人なので、自分のことばが方言と言われたら違和感を感じますし、逆に「イタリア語がフランス語の方言だ」と言われたら、それはちょっと違いすぎるので、私は別の言語だと思います。

ユネスコの立場は、情報があまりない時はとりあえずデフォルトで別の言語と考えているようです。私はそれが正解だと思います。方言だと言うと、いろいろ政治的なものが入ってきて、それに対していい顔をしない人もたくさんいると思います。自分のことばは方言ではなく、隣とはまったく違うという方もたくさんいらっしゃるので、デフォルトで別の言語と扱った方が無難かと思います。琉球列島の場合は、それが言語学的な観点、または文化・歴史の観点から見ても、複数の言語を認めた方が私はよいと思います。

コリャークに学ぶこと

呉人　言語に関するご質問ではありませんが、次のようなご質問をいただいています。「極北の地の方々が近年の温暖化が加速する中で、どのような生活の危機に直面していますか」というご質問です。

私自身の印象ですが、コリャークの住んでいる地域はあまりにも寒くて、温暖化はピンとこないというのが正直なところです。また、私自身，コリャークという小さな民族の存亡に気を取られていて、温暖化までは手が回らないということかもしれません。コリャークは、ロシアという一大国家の政治や経済の変化の影響をもろに受けざるを得ず、その成り行きに無関心ではいられないのです。

ロシアではペレストロイカが起きて社会主義から自由主義に変わったわけですが、それによってコリャークも生業に対する国家的な支援を失ってしまいました。その結果、トナカイ遊牧という生業が衰退し、ひいては生命を保持していくための基盤を失ってしまったということがあります。そのことがあまりにも大きく衝撃的で、温暖化にまではなかなか気が向かないということでしょうか。

ここで少しだけ学校教育について紹介させてください。私が一九九三年に初めてフィールドに入った当時は、週1～2回くらいずつ学校でコリャーク語を教えていました。ところがその後、次々にそのようなコリャーク語の授業がなくなってしまい、少なくとも私の



通っている現地を見る限り、今ではコリャーク語を教えている学校はほとんどないと思います。

つまり、ロシアの辺境地域では、ペレストロイカ以降の経済的な問題が山積しており、少数民族のいろいろな問題にまでかまっている余裕がないというのが現状です。

言い訳になってしまうかもしれませんが、そのよう現状に対して私がフィールドでまったく何もせずにのんきに文法調査をしていたかというと、必ずしもそうではありません。現地の人たちに何か協力できることはないかと模索してはきたのです。しかし、現地はあまりにもアクセスが難しいということがあります。たとえば沖縄だったなら、行こうと思えばいつでも行けます。しかしコリャークの人たちが住んでいるツンドラには、飛行機に乗り、プロペラ機に乗り換え、モーターボートに何時間も乗り、さらにはトナカイ橇で何日も行かなければならず、たどり着くまでに1週間くらいかかってしまいます。

アクセスが難しい僻地であるということは、同時にインターネットのような通信環境がないことを意味します。ですから、現地と通信によって連絡を取り合いながら、コリャーク語の保持活動をやっていくというようなことは不可能と言わざるをえないわけです。

今日いろいろなお話を伺っていて、日本はそういう意味ではまだまだやる余地が残されていると思いました。ぜひコリャークのようにはならないように努力を続けていただければと、切に願っています。

関西弁はなぜ元気なのか

木部　ありがとうございます。全員にというご質問も結構多くて、やはり多いのは、言語と方言はどう違うか、どう区別するのかということです。これについては先ほどペラールさんの話にもありましたので、そのくらいにしたいと思います。

それから本州にもたくさんの方言があるけれども、それは危機ではないのかというご質問もありました。確かに私の説明の中でも申し上げましたように、日本全国に危機に瀕した方言はあると思います。研究者の数がなんとかっても限られていますので、やはり地元の人をなんとか巻き込むしかないと思っています。奄美、沖縄や八丈だけではなくて、いろいろなところにも調査に行き、地元の方と一緒にやりたいと思っております。

それから方言の中でも、なぜ関西弁だけ元気なのかというご質問がありました。確かに元気な方言もあります。これはやはり話す方の意識だと思います。関西の方は誇りを持っていらっしゃるのではないかと思うのです。方言を子どもたちに伝えようという気持ちではなく、おそらく、方言を使うのが普通だという感覚です。なくなりつつある方言もそんなに卑下する必要はなくて、方言を使うのが普通だから、子どもが使うのも普通だとなるのがよいのではないか、と思っています。

地方に調査に行きますと、先ほど申しましたが、どうしても方言はダメという教育が非常に強かったので、方言をしゃべることに抵抗があって、子どもたちにしゃべってはいけないとおっしゃる方が今でもたくさんいらっしゃいます。だからそのへんの意識を変えていかなければいけないと思います。

方言の多様性はなぜ必要か

皆さんにお伺いしたいと思います。先ほども人口の統計を示しましたが、どんどん人口が少なくなっていく中で、方言を守る必要があるのでしょうか。人が少なくなっても話す必要があるのでしょうか。多様性はなぜ必要なのでしょうか。無理して方言を守ることが本当に必要なのでしょうか。むしろ英語をやったほうがよいのではないか。そのようなご意見もあるかもしれません。それについて何かお考えがあれば、どなたかお話をしていただきたいのです。

方言はもうなくなったほうがよいと思っている人はこの壇上にはいないと思うのですが。先ほど菊さんもおっしゃっていたように、なぜ大切かと聞かれても説明がなかなか難しい部分がありますね。

菊　あります。皆さんもご自分のご家族なり、大切なものがそれぞれあると思うのです。ですからそれぞれが我が身に考えて、他の人は大切ではないかもしれないが、私はすごく大事だと思うものが危機にさらされたときには、強く訴えると思うのです。だから相手の身になって考えられるかどうかということが問われていると思います。

これを覚えれば実用的であるとか、就職にためになるということではなくて、実利的なものではないかもしれないけれども、昔から継がれてきて、無条件に次の世代に移すべきものがあると思うのです。

論理的に説明できませんが、そういう自分の気持ちを訴えるしかできません。皆さんもそれぞれいろいろなご職業に関わられて、いろいろな立場の方がいらっしゃると思うのですが、それぞれ自分にとって大事なものを誰しも持っていると思います。それが私の場合はことばであり、与論島に伝わる大切な習俗です。それがどんどん廃れて危機に陥ったときに「これは次に残したい」と強く思います。だからそれぞれ皆さんがご自分で大切だと思っているものが危機に陥ったときのことを考えていただければ、私が説明しなくてもわかっていただけるのではないでしょうか。



マジョリティの責任、マイノリティの言語権

木部　狩俣先生、お願いします。

狩俣　これから言うことは、実は僕もまだ一度も話したことがなくて、ついさっき考えていたことです。

たとえば沖縄の方言にしても、なぜ方言が危機に瀕しているか、その原因はいっぱいあると思います。その中の大きな一つが、学校教育で方言は訛りとかと同じで、矯正すべきものであるという教育があって、それで誇りを傷付けられながら一生懸命標準語を獲得してきました。それから、そういう方言の訛りのある人を侮蔑したり、差別したりということもあって、「なるべくそのようにならないように」といって方言を捨てて標準語を獲得してきました。



なぜ方言が危機的な状況になっているかというと、マジョリティの人たちが学校教育の中で「方言はダメだ」と教育し、そして「お前たちは変なことばをしゃべっている」、「お前たちのことばは変である」と西洋人が言い、日本人のマジョリティが言った。ということであるなら、「こうなったのはお前たちマジョリティの責任である。だからお前たちマジョリティの責任で元に戻せ」とマイノリティが言う権利はないかと。「お願いしますから、私たちのことばをどうか残すようにしてください」ではなくて、完全に立場を変えて、「お前たちのマジョリティ責任で直すべきである」と。学校教育が方言を衰退させたのだったら、学校教育が方言を元気にさせるべきである。マジョリティの人たちが方言を衰退させたのだったら、マジョリティの人たちの責任で元に戻すべきである。今の日本はそういう国になっているのではないかと言ってもいいのではないかと。

研究者が一般言語学的に考えて、この方言、言語は大切だから大切にするというのではなくて。言語学的にはつまらないかもしれない。隣の方言と大して違っていないかもしれない。でもこれは私たちのことばである。だからこのことばを残したい。このことばをしゃべりたい。100年後も自分たちの子どもや孫にしゃべってもらいたい。そのようなほんのちょっとした希望をマイノリティの人たちが言ってはいけないのかという発想はどうだろうかというのが、実はこの会場に来てから思ったことです。ここはそういうことを言ってよい場所かなと。（笑）そういうことを聞いてくれる人がいるかなと思って。（拍手）

だから、発想を変える。「お願いします。残させてください」ではなくて、「あなたたちマジョリティの責任で元気にさせろ」という要求をマイノリティの人は出したらいけないのでしょうかというのはどうでしょうか。

木部　先ほどトマさんの言っていた権利ですか、言語権。ことばをしゃべるのは権利なのですね。自分のことばをしゃべる権利。そういう感覚が今まで私たちはなかったかもしれませんね。どうでしょう。

ペラール　確かに狩俣先生の言う通りです。無理して守る必要はないのではないかという意見があったそうですが、しかし残したいという人がいれば、「それはダメ」と言う権利は誰にもないと思います。方言を話して、これから次世代に伝えたいという人がいれば、協力してそれが成功できるようにするのがよいと思います。

木部　コリャークの方は、今言った言語権というようなことに関して、何か思いがあるのでしょうか、呉人さん。

呉人　コリャークの人たちの多くは今、お酒を飲むことに夢中になっています。お酒を飲んでいるうちにいつの間にか自分たちのトナカイもいなくなり、自分たちのことばもなくなり、自分たちのアイデンティティもなくなりという状況ですので、言語権ということについての思いもずいぶん違うと思います。

話者の立場からコリャーク語の将来について何かを言うには，人々はあまりに無気力ですし無力です。言語学者としての私自身の立場から言えば、コリャーク語という面白い言語が，掘り起こされないままなくなってしまうということは、あまりにも残念なことですが。

木部　今、英語は小学校から教えるようになりましたが、方言を使うことと英語を学ぶことは、ちっとも対立することではないのです。むしろ方言を知っているほうが、他の言語を学びやすいということがよくあります。たとえば方言は共通語と違う文法を持っていたりします。それがむしろ英語と似ているとか、そういうこともあるわけです。

私は九州の人間ですので、たとえば進行形と完了形の違い、共通語はどちらも「ている」という一語でしか言わないのですが、西日本では、「雨が降っている」という進行形と「もう寝てしまった」とか、「寝ている」いう完了形は、「よる」と「とる」で区別します。そういうことなどは、むしろ方言で教えたほうが上手くいくということもあったりするわけです。

英語あるいは英語以外のいろいろな言語をこれから若い人は学んでいかなければいけないと思いますが、方言をやっていることが、決して妨げにはならない。むしろプラスになると思います。

どうも本日は本当にありがとうございました。（拍手）

